

# 個人を孤立させない『社会』再構築を！

西暦2025年の日本の姿を「高齢化」という点に焦点を当てながら考えてみようというのが本号の問題意識ですが、しかし、「高齢化」に焦点を当てるといっても、日本を取り巻くさまざまな環境変化のことも考慮に入れないと、2025年の日本を思い描くことは困難だと思われま

す。何といても、まず、日本の安全保障がどうなっているのかが気になります。中国やロシアなど、新興国が成長を遂げ、相対的にアメリカの地位が低下するとすれば、世界は「多極化」することになります。そうなれば、日米同盟はどう変質するのでしょうか。中国やロシアとの関係はどうなっているのでしょうか。もし、アメリカの地位低下によって日米同盟が弱体化しているとすれば、日本の防衛体制は劇的に変化せざるを得ないでしょう。そういう状況下で、日本の人口減少と急激な高齢化が進むことになりな

す。高齢化し、人口が減少する国というのは、若者が少なくなってしまうため、対外膨張の思考がなくなりますので、基本的に好戦的でなくなります。つまり、これまで以上に日本は軍事面では国際社会での存在感がなくなるというのが常識的な見方でしょう。となれば、軍事力ではなく、文化力や経済力を基盤にした「ソフトパワー」が国づくりの基本として浮上してくるに違いありません。さらに、地球環境問題、食糧や資源エネルギー不足問題など、2025年には日本に巨大な影響をもたらす事柄が山積していることでしょう。ただし、これらの点については、本号では扱われておりません。

本号では、人口高齢化、人口減少に伴って、日本の経済・社会がどう変わるかという点についての興味深い論文を集めています。経済学的に言えば、高齢化や人口減少によって労働力人口が減少し、同時に、貯蓄率が大幅に低下する可能性があります。つまり、経済成長を支える三大要因である「労働投入」「資本蓄積」「技術革新による生産性向上」のうち、「労働投入」「資本蓄積」が経済成長にとってはネガティブ要因として働くこととなりますので、三番目の「技術革新による生産性向上」をいかに実現するかが決定的に重要になります。「労働投入」については、移民労働者の問題、女性や高齢者の労働力化率向上の問題が重要になりますし、「資本蓄積」については、外国からの投資をいかに促進するかが重要テーマになるとおもわれます。

しかし、2025年の日本がどうなっているかを展望する場合、このような経済成長の問題だけで済むわけではないと思われま

す。それは「社会」という問題が重要になってくるからです。江戸時代の日本社会は庶民文化が花咲きました。戦後日本は「企業」が個人の生活に深くかかわることにより、「社会」の代役を務めてきたように思われます。しかし、グローバル化の進展により、日本企業は「共同体的な社会」としての役割を放棄せざるを得なくなり、徐々に会社と個人の「契約に基づく社会」に変質してきました。その結果、日本社会は拠り所を失った孤立した個人が目立つようになり、それが異常犯罪の多発といった社会現象になっているように思われます。

アリストテレスがはるか昔に看破したように、人間は社会的動物であり、人と人のつながりを担保する「心が通い合う社会」に頼らないと生きていけない存在です。日本の会社がドライな「契約に基づく社会」になるにつれ、個人は依存すべき「社会」を失い、孤立感を深めています。このままの流れが変えられないとすれば、2025年の日本社会は多くの日本人にとって心の拠り所がない、砂漠のような社会になってしまう恐れが強いと思います。

その意味では、個人が心のよりどころにできる「社会の再構築」ということがこれから2025年に向かって進む日本にとって、非常に大きなテーマになるのではないのでしょうか。詳しいことはここでは語れませんが、私は明治維新の「廃藩置県」に匹敵するような大きな制度改革が必要だと考えます。中央政府の優秀な官僚が地元に戻って、自分の故郷を本当に元気で、文化花咲く社会に再生するには何が必要かを考え、実行することができるような、本格的な「霞が関改革」が必要不可欠なのではないのでしょうか。

